

◎衣川さんからのメール：岡村さんの高校生の時代はどんなのだったのでしょうか？世間ではビートルズやベンチャーズやら和製グループサンズが僕らの世代の中心話題。政治の世界では60年アンポが終わり70年アンポの前。全学連の羽田や佐世保の闘争のころかなあ。全共闘はまだなかった。新宿のフーテンはいたのかなあ、シンナーなんて吸っていた。サイケデリックというデザインアートが流行った。

◎高校時代の話、これを語る、これはいやだなあと思いつつ、一番に思い出すのが“高校三年生”という歌です。橋幸夫という歌手だったか、この歌を熱唱していたのをTVで見っていた、「まさに オレ達のことを歌っている 丁度 高校三年生だ」と思ったものです。二十歳の頃、新宿の美術研究所に通っていたが、JR 新宿駅前広場の腰かけられる場所に、透明袋でシンナーを吸っている奴がぎっしり並んでいた。新宿騒乱罪の日も、夜に新宿駅から電車に乗った。当時はまだ登山に嵌まっていなかったが、黄色のでかいキスリングが通路にまであふれ並んでいたのを横目で見ていた。毎晩花園神社に小さい灯りがポツリとあった。「あれは・・・」「あれは アングラ劇 らしい」唐十郎の赤テントだった。全学連や全共闘は興味がなかった。

◎「数学だけができたそうですね」「よく百点を取っていた 模擬試験でも 京大工学部なら 半ばの成績で合格と 書いてあった」中年の大人になるまで忘れていた。仲の良かった仲間にもっとすごい奴がいた。習ってもいない数式をすらすら書き、ぼそぼそ解説していた。こんな奴が何人かいたのでオレぐらじゃたいしたことはない、劣等感の方が強かった。「数学は ひらめきと 感と 運だ」そう思っていた。

◎数学の問題をしばらく眺めていると、頭の片隅の一か所にぼんやり明かりが灯り、いくつかのシュミレーションを試すうちにえんぴつが動き、解けていった。この感覚が今、絵を描くときにも、この姿勢は役に立っているのでは、と、訳の分からぬことをほざいている。とくに60歳を過ぎたあたりから、次の絵を描こうかなと白いキャンバスを引っ張り出し、その白いキャンバスを眺めながら、最初の色は、構図は、動きは、そんなこんなシュミレーションが頭の中に出来上がる。あとはパレットがわりの器に絵の具を入れ、よくかき混ぜ、筆にたっぷり絵の具を含ませ置いていく。筆を置きながら、筆を置いた場所を確認するまでもなく思った場所に思った色が思った通りに載せられている、という快感が味わえる。

◎オレにとって、そんな数学から離れ一年も経つと、頭の片隅からも忘れ去っていった。今はなにがなにやらまったく頭の片隅にも数学は残っていない。仲の良かった仲間も後日談では、ひとりを除いてほとんどがその世界では立っていない。その一人も式を羅列する数学の先生では無いようだ。少し前に、“ポアンカレの難問”という話を読んだ。その数学の内容はまったくわからないけれど、百年少し前に、ポアンカレがいくつかの数学の難門を提示し、「だれか解けるかな」と言った。世界中の数学者が躍起になってその難問に挑戦し、人生を潰した人や、もうちょっとというところで断念した人や、そんな人たちの紹介の後に、ロシアの片田舎出身の学者の論文が世界をめぐった。「まさか あれれ・・・」後に、「これは正解だ 1億円の賞金と表彰式がある 出てきてください」という広報に、そのロシア人学者はついに姿を現さなかったとか。

◎一番に感じるのは世の中の変化、変化のスピードが上がってきている。オレの生きた半世紀ちょっとでも、あれに、これに、それにと、様々に変化していった。変化の話、生きていく中での価値観の話、それぞれの地域の、国の体制の話、時空を超えて考えると、「何も変わっちゃいないよ それはお前のわがままだ たかだか半世紀じゃないか・・・」いろいろな話が出てくる。若い頃から変化は好きじゃないと思っていた。単純な話だけれど、絵の具屋に売っている絵の具、勉強を始めたころから半世紀以上経って、「あれはなにをする絵の具 あれが売っていない」首をひねりながら絵の具屋の棚を見る。

◎変化はいやだいやだとぼやくが、50歳ぐらいからのコンピューターの出現には驚嘆している。コンピューターには世話になりっぱなし、これに裏切られたとか騙されたということはない。というものの、大逆転が目の前にぶら下がっているのを知らない、バカな、のんき野郎め、かもしれないが・・・。

◎小学生のころから絵を描くことは好きだった。当時、昭和30年前後は、「国民はまだ飢えていた」という話をしていた方がいた。「バナナが 卵が 肉が 腹一杯 喰いたいなあ」こんなことを口に出すと、「我慢しなさい このあいだまで みんなが お米も なかったんよ・・・」なんて言葉が飛び交っていた時代だった。そんな時に前衛芸術が始まった。絵は風景・静物・人物絵画が普通の絵、それが相場だった時代に、大阪で、“具体美術”が始まった。

◎具体美術：これは吉原ゴールデンサラダオイルの御曹司が始めた前衛絵画の運動で、今でも世界的に有名な運動です。「今までの 既成の絵画を捨てる 新しいことに挑戦 ヒトがしていないものに挑戦」という運動だったと思う。小中学時代はまだ家庭にTVが普及しておらず、映画館で映画が始まる前に必ずニュース映像が流れていた。ニュース映像の中で具体美術が紹介されていたのをいまだに覚えている。白いキャンバスにバケツに入った絵の具をぶちまける人。畳2枚ぐらいの大きな紙を縦列にいくつか並べ、猛スピードで紙を破って走っていく人。「これが 芸術です」「えええ これ絵なのか・・・」中学校の数学の先生が、「あれが 絵なんだって バカバカしい 世も末だねえ・・・」なんて話していたのを今でも覚えている。

◎吉原ゴールデンサラダオイルの御曹司：吉原治良：社長を続けながら具体美術協会を引っ張っていった。日本の禅宗で描かれていた“丸”を大きなキャンバスに描いていた、そんなすごい作家だった。白髪一雄：キャンバスの上に絵の具を厚く盛り上げ、吊したロープにつかまり、足で絵の具をグニュグニュ・・・これがなかなかいい絵を創っている。元永定正：絵の具を吹き付け、漫画風、絵本風・・・そんな作品。元永の絵はオレ好みではないが、絵が売れた人だったかな。

◎そんな具体美術以降、美術大学や在野から、前衛美術家が続々湧き出てきた。芝居や踊りの世界もケタイな奴がどんどん出てきた。田中泯：いまでも踊りが見られる一人だ。土方巽の門下生らしい。時々TVドラマなんかで老人の役を演じている、1945年生まれだそう。そういえば、麿赤児も時々TVドラマなんかで悪老人の役で見ていたがまだ存命かな、好きな役者だった。1943年生れだ。

◎高校時代から絵を描き始めたが、美術学校の存在など知らなかった。美術学校の受験用の専門勉強があるとは知らなかった。デッサンや色彩を勉強しなければいけないなんてことは高校を出てから知った。高校を出て、油絵様式で生物や風景を描いた、筆が走った、筆が自由に動いた、絵が面白かったが、美術学校には縁がなかった。東京芸大を首席で卒業したという友人が70歳の頃しみじみと、「基礎勉強をやり過ぎた 今はもっと自由だ それでいいんだ」なんてしみじみ述懐していたが、彼もたくさん売ったようだ。

◎高校を出て、天王寺の美術研究所に通い始めた。デッサンは人並みには描けたが絵を描くほうが楽しかった。二十歳代は基礎だ、デッサンだ、当時の風潮はまだそんな時代だった。そんなこんなで50年、60年経った今、「オレは 具象の絵かき」なんてほざきながら、抽象画を描いている。1946年生まれのオレ、日々、絵を描いて、たまに、山に登って、おかしく生きている。さすがに体力、気力、知力、が衰えてきているが、死ぬ時まで生きるわなあ。

上村佳孝著く昆虫の交尾は、味わい深い・・・。>

◎本の冒頭に昆虫のオスの交尾器の写真が載っている。トンボ、カマキリ、チョウ・・・。普通に想像しうる、ポコリンと出たペニスではない、奇天烈な花のような、微生物の顕微鏡画像のような、水中生物のような・・・。これらの画像を見ていると、この先生、昆虫少年がそのまま大人になったような人かもしれない、日々昆虫の身体を、舐めまわし、触りたくり、「ケタイだ 面白い 大発見」なんて騒ぐさまが目につく、日々の研究生活が楽しそう、うれしそう、見ていて素朴でいいねえ。

◎通常オスは相手さえ見つければ次々と交尾することができ、たくさん子を残せる。メスは相手の数が増えても子の数は増えにくい。交尾にめぐって、オスとメスの思惑は一致しない

◎精子は小さい、卵は大きい。この二種類の配偶者の出会いには交尾は必須ではない。多くの魚は交尾はなく、メスが水中に放卵し、オスが水中の卵に放精し、受精が起きる。

◎先生各種昆虫の交尾イラストを載せている。昆虫君たち、交尾の際はオスがメスの上に乗るものかと思っていたら、そうでないものもある、コオロギはメスが上だそう。シラミまで交尾をするそうだがあれは昆虫か。

◎シラミ：昆虫綱咀嚼目シラミ亜目の昆虫。アタマジラミ（頭髪）・ケジラミ（陰毛）・コロモジラミ（衣類）

◎トンボのオスは、自身の精子を優先させるために、メスの体内に残っているほかのオスの精子を掻きだす道具を持っている。トンボはオスもすごい、メスもすごいね。トンボ類はカゲロウと共に原始的な姿をとどめた昆虫だ。彼らの翅は古いタイプなので、「パタパタ」と上げ下げできるが、カブトムシのように、「たたむ」という動きはできない。

◎カマキリの性的共食い。交尾の際、メスがオスを食べてしまう。オスは死して自分の子の栄養となるはずが、カマキリのメスは複数のオスと交わるので、死して他人の子の栄養になる場合もある。自然界では30%のオスが逃げてゆく。オスが素早くメスに飛び乗って交尾器をかみ合わせ、交尾が終了すれば一目散に逃げる。

◎カマキリのオスは死を覚悟で交尾する。ミツバチもすごい。ミツバチの女王は数万匹の子を産むが、働きバチになるメスが欲しい。子のオスは無精卵でいいらしいが、子のメスは受精が必要らしい。女王と交尾するオスの交尾器は脆弱で、破れショック死するらしい。一回きりの使い捨て交尾器なのだ。

◎ノミ：こ奴も昆虫だそう！子ども時代、親が、「ノミの夫婦」という言葉を教えてくれた。メスが大きい。

◎コバネハサミムシ：交尾時間は4分ぐらい。30秒から1分で、挿入器はどんどん奥に入っていく。1分30秒でもっとも深くまで挿入された状態になる。オスは挿入器の先端から精子を出しながら挿入器を抜いていく。虫の名前が無かったら、いたくエロチックだね。メスは複数のオスと一晩で平均14回、多い個体は40回も交尾をする。なぜなのか、わかっていない。

◎トコジラミ：通称、南京虫と呼ばれる。この虫は、オレの親の時代の人々の語り草だが、見たことがない。

◎いくつかの昆虫は、オスの交尾器に刺があり、しばしばメスに傷をつける。なぜなのか、わかっていない。

◎カマキリ、ゴキブリ、シロアリは親戚だそう。

◎昆虫の交尾器研究の本質的な面白さは、顕微鏡など最低限の器具があれば、工夫次第でだれでも謎解きができる。お金と時間をついやしてDNAを調べても、生物のこと、はっきりした答えは出ないことが多い。手術でペニスを除去すれば、これは慣れれば肉眼でもできる、あっという間に生物のパズルは説ける。

◎ジジイになって、「下ネタ話が好き」と「好色な方」とは違うもだと思っている。下ネタ話は色気を失ったジジイが、目ヤニ鼻汁を垂らしながらうそぶいている。好色はジジババになっても、お洒落に気をつかい異性の関心を引こうともがく男と女。ともにだんだん疎遠になってきた。ましてこのコロナの時代、人と会うな、人と話すな、人と触れ合うな、こんなつまらん制限を付けられひとりで過ごす分には、感性も、情緒、情念も、消え失せていく。ヒトも昆虫と同じ生物、ものを喰うこと、生殖をすること、同じようにする。虫けら風情がと威張ったところで、虫けら君の方が堂々となさってますよね。

呉地正行・須川恒（ひさし）著<幸せを運ぶ鳥、日本の空にふたたび！>

◎須川先生は、昵懇のK子さんの従兄弟です。彼とは直接会ったことはないが、我がアトリエで絵を描いておられるK子さんにTV電話がよくかかってくる、画面を見ながら、「よ～ や～」と囃子を入れているので話した気分になっている。須川先生は、K子さん、オレと同じ歳、京大出身の鳥学者。友人の小林先生弁：宇宙の専門家は夢見る少年のようなやつが多い。同じように、鳥や昆虫や猿の専門家も夢見る少年かな。

◎本の冒頭に漫画が出ている。

- 1) 20世紀初頭、世界的毛皮ブームで、シジュウガラガンの繁殖地にキツネは放された。
- 2) 1936年 アリューシャン列島からシジュウガラガンの姿が消え、日本への渡来もなくなった。
- 3) 1962年 アリューシャン列島で、米国の学者がシジュウガラガンの小群を発見、米国政府が保護に努める。
- 4) 1972年 日本の宮城県で、3羽のシジュウガラガンが発見される。
- 5) 仙台市にシジュウガラガンの繁殖施設ができる。
- 6) 仙台市で生まれたシジュウガラガンの親鳥を、カムチャッカに送る。
- 7) 2007年 放鳥した、シジュウガラガンが家族を連れて渡ってきた。
- 8) 2015年 渡来数3000羽を超えた。

◎観文禽譜：堀田正敦（伊達家出身）：幕府の若年寄：1831年12巻：江戸時代最大の鳥類図鑑：絵も文もすごい。シジュウガラガンは甚だ多く、終日狩りをすると十のうち七八羽はこの鳥を獲た。田にも畑にもやって来て、実りを害する。肉の味はよくない、時には臭みもある。

◎ラッコ、ビーバー、キツネ、テン、聞いたことがある毛皮の材料。富とお洒落の象徴、毛皮を纏った富豪たち、オレの幼少時代にはこんな人たちがいたが、動物愛護なんて言葉で、毛皮はほとんどみかけなくなった。なぜ寒冷地の島にキツネ、それはキツネにとって、寒いのがゆえにいい毛皮、鳥などの天然食料、島ゆえに逃げ出せない。カムチャッカやアリューシャン列島の島にキツネが放たれ、飼育され、加工され、高級毛皮になった。

◎職業柄、筆を使う。筆はほとんど動物の毛で作られる。最近は化繊の筆もあるがこれは物が悪くて使えない。毛皮や筆を作るために動物を飼育し殺し毛や皮をいただく。ネットで見るとその作業は悲惨な様相を呈している。もちろん肉をいただくのも同じような様相かもしれないが、この様相にはいささか気が滅入る。「何のことだ もう少し 詳しく 説明しろ」と怒られそうだが、知りたい方は自身で調べてください。

◎1962年 米国魚類野生生物局が、毛皮業者も近寄れない小島で、シジュウガラガンの小さい群れを発見した。アリューシャン列島国立野生生物保護区の管理者、ロバートのプロジェクトのひとつが、シジュウガラガンの群れがかつての繁殖地の島に復活させる方法を見つけることだった。十数年、長旅の末、奇跡は起こった。キツネが放たれた島は沈黙の地だが、険しいバルディール島は溢れんばかりの海鳥の声がした。草むらから4羽のシジュウガラガンが飛び出し、ひなの声がした。その後、米国の絶滅危惧種保護法に基づき活動が開始された。アメリカ国内での越冬地域、営巣地域だったアリューシャンの島々でのキツネの駆除、シジュウガラガンの島への移送などが試みられた。

◎アメリカは軍隊と経済の国だと思っていたが、こういうことにも人や金を使う国だった。もっとも、アリューシャン列島で米国原子力委員会による、核兵器用地下核実験が3回も行われている。

◎ガン類には、卵から孵化した雛が、最初に見た鳥を親として認識する、「刷り込み」という習性があり、強い絆が生まれる。同じように雛が成長して幼鳥となり、最初に飛び立った時、眼下に広がる景色を見て、ここが自分の繁殖地だと認識する。夏が終わるとこれらの幼鳥は渡りの道を知る雄親鳥に導かれ、家族とともに越冬地に渡り、その場所と渡りの経路を学習する。こうして越冬地に渡った幼鳥は、冬が終わると再び放鳥された島に戻り、翌年から自力で渡りをするようになる。

◎絵なんてもんに、うつつを抜かす、オレだけれど、鳥やサンもすごいねえ。

- ◎安威川に来ている。季節は夏が終わった、まだ暑いけれど風は涼しい。いちばん感じることは、日が短くなってきた、午後の6時ごろになると薄暗くなってくる。これを日々感じる、「え こないだまで 暗くなってくるのは 7時ごろ だったぞ」と驚きの声を上げている。真夏は太陽がギラギラしている4時ころまでとてもじゃないが、安威川に出てこれない、強烈太陽に身を焼かれる、たちまち熱中症で倒れる。涼しい季節は、昼めしを食って安威川にやってくるが、夏は夕方4時だ、4時半だ、と家を出ている。安威川を走り始める時間がまだ4時すぎだと、日が燦々なんて詩的な言葉ではなく、暑くて倒れてしまう。もっとも、草刈りのおっさん連中は、ヘルメットを被って、じりじりの炎天下で土手の草を刈っている。休憩場所には2リットルの茶のボトルが並んでいる。
- ◎今年の夏は暑い日もあったけれど、長雨が続き、涼しい日が多かった。去年は37度なんて高温の日が続き、地球温暖化だと騒いでいた。それでも夏は、「力が出ない だるい だめだダメだ」という日続く。気象庁のページを見ると、オホーツク高気圧と太平洋高気圧の、例年にない位置関係の結果、梅雨の末期のような状態になった。西日本と東日本の太平洋側には記録的な降水量と日照時間不足があったそうだ。
- ◎冷夏の年は米が採れないと昔は騒いだものだが、今年はどうなのかな。米のことはとやかく言わなくなった。豊作でも凶作でも余っているのかな、みなさんが米を食わなくなった。ただ、野菜が高い。オレンヂは、オレが食料調達係、隔日ぐらいに自転車で近所のスーパーマーケットに買い物に行く。野菜が高いとはいえ、菜っ葉の束が普段は100円のところが、200円、300円という数字になるぐらいだけれど、「ええ 高い 買わずにおこう」なんてけち臭いにはなしになる。
- ◎食う、ということでは、安威川にいる生物たちも、さかんに食っている。草や実を食う鳥、ハトやカモは一日中なにかを口に入れ、もぐもぐパクパク状態。水鳥は浅瀬や水の中に集まって、ぼ~っとしている奴もいるが、鶉はさかんに潜っている。鶉の狩りの様子は水中なので見たいが見れない、小魚をたくさん上手くゲットするらしい。サギ類は立ち姿で、水中の獲物を待ち伏せいきなり嘴を差し込むが、成功率は低そうだ。カラスは食いものやおもちゃを仲間同士で奪い合ったり逃げ回ったり、それとも仲良くしているのか、ギャーギャー飛び回っている。奪い合うし、喧嘩もするが、仲間同士の殺しはない。
- ◎肉食生物の、仮の瞬間はなかなか見れない、安威川ではほとんど見たことがない。サギやカワセミが魚を飲み込むぐらいは見る。トンボやハチも肉食だと知った。カブトムシなんか恐そうで力強い彼らは甘い汁が好きだそうだ。
- ◎夏が終わるという季節、日の入り時間がどんどん早くなっていく。その時間が加速度的に進むのか、それは感覚だけなのか・・・。そもそも太陽の光と、地球の自転と、地球軸の歪みの結果、季節があらわれる。ただ、どこがどうなればそうなるのか、頭がこんがらがってわからない。昔、地学の教科で習ったような気もするがまったく知識が失せている。地球の自転の曲線がなだらかに上がったたり下がったりしていくのなら、上り坂にしる下り坂にしる、そのあたりの勾配が急で、水平に近づくとつれ、まったくと流れていくように考えるが、これはオレだけの感覚なのか・・・、間違っているにしる、たいしたことではない、どおっと、いうことではないということにしておこう。
- ◎カモ類がいるね、奴らはいつもいる。カモもいくつかの種があることは聞いているが、どれがどれやらわからない。「あれが ○○カモです」と教えられてもすぐに忘れてしまうので、最近では聞かないことにしている。あれだけたくさんいた、オオバンを見ない、いつから居なくなったのか。検索すると、留鳥と、渡りが、いるらしいが、安威川のオオバン君は渡り鳥で、夏になると北の方に帰っていったのかも。
- ◎カラスめ、2.3メートルぐらい近づいても逃げない奴がいる、「おい なにしてる おい」と声をかける。きょとんとして、「あほな オジンめ」とつぶやいている。カラスはひよっとすると話せるかもしれないね、その反対に、ハトとの会話交流はない、彼らは人を気にしない、ただ居るだけ、いつもなにかをついばんでいる。
- ◎もう3回も展覧会が抜けているというのに、まだまだ、コロナのあほうめ、居続けて御座る、やだねえ。

野口武彦著<今昔物語いまむかし>

- ◎久しぶりに今昔物語を、とはいえ、時々、パラパラは、していますぞ。今日は糞尿の話。今昔物語でちょっと嫌だなと思うところは、「だから こういう結果になる 仏教を大事にしないよ 仏教を信じているからこそ こんないい結果になった 仏教をないがしろにしているから こんな悲しい結果になった」という教訓が最後につく話がいくつかある。どなたかの説で、「今昔物語の作者が 僧侶だから そういう抹香臭い話が出てくる」ということを聞いた。その点を除けば、腹を抱えて笑う話、くすっと笑いがこみ上げる話、しみじみ考えさせる話、様々がある、次々と続く。当時の格差社会、貧富も身分も、今よりもっと大きかったと思う、今昔物語には、上は帝から、下はゲス野郎まで様々人種が登場してくる、これが面白い、これがうれしい。
- ◎花の都パリ、こういわれるけれど、トイレ事情は劣悪だったと聞いたことがある。古代ローマには下水道があったが、パリには無かった。庶民の各家庭では“おまる”に排泄し、それを朝になると前の道路にぶちまける、道路はごみと馬糞と人糞と・・・ということだったらしい。宮廷内でも事情は似たようなものだったとか。しかもフランスは内陸部に在ったので水が乏しく、風呂に入る習慣が無かったそうです。香水（体を拭くだけでは・・・）・ドレス（どこでも排便できそう）・日傘（上の窓から糞便を撒かれたらいやだね）
- ◎源氏物語<桐壺>低い身分の更衣が（女官、天皇の衣替えをする役であったが、のちに寝所に奉仕するようになった。）天皇の寵愛を受け毎晩のように帝の夜の寝所に迎えられる。それをねたんだ数多き朋輩達にいじめを受ける。「寝所に通うあちこちに、あやしき業（わざ）をしつつ 御送り迎えの人の 衣の裾へ・・・」通路に汚物、糞便をぶちまけ、更衣が帝に召されるのを妨害した。
- ◎平安貴族の館にはトイレがなかった。寝殿造りでは、“おまる”のような容器を使っていた。トイレである“尿ひり所”樋殿（ひどの）に、大使用のしの筥と、小使用の大壺を置いていた。江戸時代には雪隠があった。
- ◎十二単はたいへんだったようだ。まずお供の女が姫の打掛を取り、袴を脱がせ、長い髪を前のまわし帯にはさむ。大使用のしの筥や、小使用の大壺の上にしゃがみ、用を足した。
- ◎侍：世界の人が憧れる日本の侍、平安時代は、寝殿造りのトイレ、樋殿（ひどの）に奉仕する身分、トイレ掃除人。“さぶらう”だとか。
- ◎上品な源氏物語では締め出されている糞便の話が、今昔物語では遠慮会釈なくあけすけに語られる。
- ◎巻一九第十八「三条大皇太后宮の出家したまふ事」藤原遵子（じゅんし）：太政大臣の娘、円融天皇の皇后だが、老齢に達して出家しようと思立ち、名僧の誉れ高い増賀聖人の手で髪削ぎをしてもらいたいと希望した。徳は高いが短気な聖人だ。宮の御前で出家の作法を執り行い、簾の中に入り、鉢を入れる。「わざわざこの増賀を召されたのはなぜかのう。ひょっとしてわしのむさい一物がでかいとお聞きになられたか。たしかに人よりは大きかったが、今は練り絹みたいなフニヤマラじゃ。若い頃はまんざらでもなかったのじゃがのう」あたり憚らぬ雑言に、周囲の人々は冷や汗たらたら。簾から出てきた聖人は、「腹具合が悪い がまんできん」聖人は縁先にかがみこみ、衣の裾をからげ尻を丸出し、下痢便をひり散らす。すこぶる汚らしい音が響き渡る。皇太后の得度と言えは国家行事に近い。荘重なセレモニーの最中に起きた空前の珍事、猛烈な臭いを放った。
- ◎ところで、「岡村 君の糞は どんな形だ どんな色だ 大きさは 量は 写真に撮って見せてくれ」こんなことを言う人はいないだろう。日々毎日のように排泄しているが、これは人さまにお見せするものではない。こんな忌まわしいものを、アートにできないものかねえ。うんこアートなんて、あんがいいけるかも・・・
- ◎そらあ、長い人生、糞尿の話になれば、様々なシーンを思い出す。酒好きだったオレは、軟便が多かった、増賀聖人じゃないけれど、そういうエピソードもあったやも。フフフ、そのうち話すぞ。
- ◎糞尿の話も、フフフと笑っておられるのももう少し、いい感じのジジババが“おしめ”をあて日々介護してもらおう。80歳という年になれば何人かが寝たきり状態、寝たきりが何年続く、次にナンマイダである。

- ◎8:45 坊村の駐車場から出発。前川・林のお二人が同行。登山計画書を車のウインドウに置いている。先日三宅さんから、「山保険を調べています」と聞き、早速“ヤマレコ”を載っている山保険(4000円)に加入した。若い頃に“雪山も入る”という条件の保険、1万円ぐらい/年に入っていた。
- ◎“ヤマレコ”いくつかある山サイトの中で、使いやすい、性に合っている、ということで使っている。調べたい山の地図を出す。出発地点、経由地点、山また山、これらを地図に記していくと、コースとコースタイムを教えてくれる。山名を検索すると最近の皆さんの登山情報、写真、文章、地図、などが出てきて、タイムリーな情報が得られる。地図とルートと皆さんの住所等を書き、コンビニで複数枚焼いて登山届にも使っている。
- ◎林さんが、「母上の 介護があるので 7時には 帰りたい」ということで、茨木ICの近所に集合、交通費を2000円ずつ車オーナーに渡す。
- ◎調べると、ちょうど、一年前に登っている。山は気に入れば何度も来たいタイプなので、ここももう何回登ったか、登るたびに、「しんどい 道を間違えた」と言っているが、人と会ったのは2.3回ぐらいしかない。
- ◎駐車場→120 鎌倉山→80 オグロ峠→30 峰床山→200 駐車場：計7時間20分11.4キロ。
- ◎1時間ぐらい歩いたところ、山道の横に水溜まり、動物たちの水飲み場、ヌタ場がある。「シカ あれ でかい 指の跡 爪の跡 クマ君かな」鈴を喧しく鳴らしながら歩いているので、獣たちには遭遇しない。
- ◎2時間ぐらいで鎌倉山にやってきた。三笠饅頭をいただいています。先ほどは凍ったフルーツゼリーがほど良く融けて美味しい。「スプーン 無い?」「あるよ」「ありがとう」「終わったので返すね 家で洗ってね」「洗わないよ」「次の人にまた貸すよ」「えええ 洗わないの」書いてしまったので、袋入り新品を2個補填。
- ◎12時過ぎ、オグロ峠に着いた。鎌倉山までは登りが続き、鎌倉山からここまでは、あがったり下ったりの連続。だらだら尾根、ここは迷いやすい山、人が入っていない、前にオレが付けた印が色あせてぶら下がっている。
- ◎ここらあたりの山は葉の茂る今の季節、眺望がほとんどきかない、時々風通しのいい鞍部、風がきつすぎて樹が育たないところでは、近所の山、雲の多い空が見られる。
- ◎1時に峰床山てっぺんに着いた。「さあ メシを」どかりと座って弁当を広げる。新白米をいただいたので、今日は白いご飯。手造り梅干し、野菜炒め、たまご、美味しくいただきごちそうさま。
- ◎八丁平をぐるりと回って帰りたいが、水の流れる湿原には、ヒルが嫌なので、今日はそのまま往復コース。いつもなら峰床山のあたりではひとりふたりの人と会うが、今日はまったく誰もいない。坊村の駐車場は満杯ぐらいの車だったが、人気の武奈ヶ岳か、葛川の釣りか・・・。
- ◎快晴の予報だったが、黒い雲の多い空、青空がちょっと見えるぐらい。二日前に台風の雨がおおいに降ったので、二日目の晴れの今日も地面は湿っている。大雨が降れば乾くまでには何日かかかるんだね。この上り下り、半そでのシャツ一枚だが汗でシャツは濡れている。それでも上がりきったところでは涼しい風が吹く。
- ◎樹林帯の樹々、植林されたスギ・ヒノキ類の森の中は薄暗く陽が差さない、広葉樹の雑木林の森は針葉樹林帯に比べまだまだ明るい、それでも向こうは見えない。季節が進めば黄葉が始まり、葉が落ち始め、雪が降る。
- ◎2時、「また 迷っております」オグロ峠から調子よく歩いていたが、「印が無いね」「あ 古びた印がある」安心して進むが、「どうも違う」「また迷ったか」「迷ったら、深追いせずに バックだ 必ず 道が 見つかる」
- ◎巻き道でショートカットと思ったが、これはケモノ道。斜面を横切るトラバースは、「おととと こわいやばい」と這いつくばって進むしかない。上り下りのケモノ道は、斜度がきつい。シカもイノシシも少しぐらいの急斜面は、とととと走っている、恐がりのオレはなかなか進めない。「怖い しんどい ケモノ道は」
- ◎3:15 予定より15分早く鎌倉山到着。ここまで来れば道はしっかりしている、だらだら下りだけの一本道、「しんどい しんどい」で休憩。水をたくさん飲んだ、途中オグロ峠で補給したので2Lは飲んだかな。
- ◎予定より早く駐車場まで下りてきた。登り口の1分ぐらいの場所に水が流れ草が茂っている、「ここはいやだね さっさと通過しないと ヒルがいるはず」なんと駐車場で靴を履き替えていると、1センチぐらいのヒルを2匹発見、指で押し潰したが、噛まれたくないね。